

## 慧可と慧笮

伊 吹 敦

はじめに

世親撰、北魏の達摩菩提譯とされる『涅槃論』については、以前から成立が問題とされてきたが、別に論ずるように、その内容と『續高僧傳』『智度傳』の記録から見て、翻譯などではなく、それを初めて講義したとされる慧笮の著作と見るのが妥当である。とすれば、ここで當然問題とすべきは達摩菩提と慧笮と菩提達摩と慧可との同異である。以下においては、この問題を考察すべく、それぞれ史實と認め得るものを検討し、然る後に兩者の接點を探っていこうと思う。

### 一、菩提達摩と慧可に関する史實

菩提達摩に関する最も古い言及は、周知のように、五四七年頃に著された楊銜之の『洛陽伽藍記』(A)であり、

A 1、波斯國の人で百五十歳を自稱していた。

A 2、洛陽の永寧寺の塔や修梵寺の金剛神像を讚えた。

などの事跡を傳えている。

一方、慧可への言及は曇琳撰という『二入四行論』の序文(B)に始まる。その成立時期は不明であるが、北周武帝の破佛の際に慧可と曇琳が交流を持った時期のものであろう。數種のテクストがあるが、内容的には大きな相違は見られず、

B 1、菩提達摩は、南天竺國の大婆羅門國王の第三子であり、布教のため中國に來て、漢魏に遊化した。

B 2、しばしば誹謗・中傷されたが、道育と慧可という弟子を得、彼らに『二入四行論』を説いた。

などといったことが記されている。

『續高僧傳』(C)は、禪宗祖師としての菩提達摩像や慧可像が形成される以前の傳記を傳える最後のものと言えるが、菩提達摩に関する記述には、『洛陽伽藍記』や『二入四行論』の曇琳序に基づくところが多い。しかし、

C 1、初め、宋の南越に渡來し、後に北魏に移った。

などの説が新たに加えられている點は注目される。

一方、慧可については、従來の言及が餘りに少なかったこともあり、次のような極めて多くの新事實を傳えている。

C 2、「僧可」とも言い、俗姓は姫、虎牢の人である。

C 3、獨學で内典・外典に通じた。

C 4、四十歳の時、菩提達摩に出遇つて六年間師事し、心の糧として四卷本『楞伽經』を授けられた。

C 5、その後、名聲は高まり、獨特の辯舌で有名となった。

C 6、天平の初め(五三四)に北魏が分裂すると、東魏の都、鄴(現在の河北省臨漳西南鄴鎮東一帶)に出て布教に努めた。

C 7、北齊が東魏に替わつた天保の初め(五五〇)頃には、向居士と文通によつて交流した。

C 8、三論宗の慧布(五一八—五八七)も鄴下で慧可に參じた。

C 9、道恆らの迫害に遇い、その後は鄴や衛州(現在の河南省汲縣)、相州(現在の河南省安陽市の南)を彷徨いつつ、俗諺や

世事に託して人びとの世俗の通念を除くことに努めた。

C 10、那禪師は、もと儒教の學者であつたが、相州で慧可の説法を聴き、學士十人とともに出家して弟子となった。

C 11、建徳六年(五七七)、北周の武帝が北齊を併合して破佛を行つた際、曇琳とともに經像を護つたが、二人とも賊に臂を斬られた。また、曇琳に對して『楞伽經』の講義も行つた。

C 12、弟子には、上記のほか、曇禪師、惠禪師、盛禪師、端禪師、

長藏師、眞法師、玉法師、善師、豐禪師、明禪師、胡明師などがあり、善師、豐禪師、明禪師、胡明師などは『楞伽經』の註釋を著した。

慧可と慧荷(伊 吹)

C 13、慧可の弟子や後裔には「南天竺二乘宗」を稱して『楞伽經』を講ずるものがおり、法冲(五八六—?)は彼らに學んだ。

C 4 5 6に據ると、少なくとも五三四年よりも數年前までに菩提達摩は歿したか、或いは歸國したと考へるのが妥當なようであり、それ以前に四十歳で慧可が初めて菩提達摩に出遇い、六年間に互つて師事したとすれば、五三四年に鄴に出た頃は既に五十歳前後になつていたはずである。従つて、慧可の生年は孝文帝の太和八年(四八四)前後、菩提達摩との相見は孝明帝の正光四年(五二三)前後となり、破佛の際には既に九十歳代であつたということになる。

慧可は、菩提達摩と別れた後、北魏の分裂とともに鄴に移つた(C 6)。この頃、慧布が參じたというし、迫害にも遇つたのであるから(C 8, C 9)、相當な名聲があつたと見てよい。しかし、迫害の後は住所を定めず、國中を遊行して廻つたようである。そのためか、この間の事跡はほとんど傳えられていないのであるが、或いはそれを補うものかと思われる金石資料が存在する。それは北京圖書館金石組編『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』第八冊所收の「暈禪師等五十人造像記」であり、その背面に造像關係者が列擧されている中に、「比丘」として「惠可」の名が見えるのである。

この造像記は、北齊の武平三年(五七二)に暈禪師が中心となつて甞水村(現在の河北省唐縣の西の甞水郷)に阿彌陀の

白玉像を建立した際のものであり、時代や地理の点から見て、この「恵可」を慧可と同一視することに矛盾は生じない。しかも、この造像記で注目されるのは、「恵可」とともに「智際」という僧の名が掲げられているということである。「際」は「璨」の異體字であるから、この造像記にいう「智際」が、『續高僧傳』の「曇禪師」や禪宗でいう「僧璨」と同一人物である可能性は十分にある。

この造像記にいう「恵可」が果たして慧可であったとすれば、慧可は少なくとも破佛の直前まで北齊國內で活動していたことになるが、これは「法冲傳」の記載から割り出される慧可の歿年とも整合性を持つ。法冲は慧可の直接の弟子に學んだというが、その時期と場所は明示されていない。しかし、傳記の行文に沿って理解すれば、貞觀初年（六二七）以降、安州においてと見るのが自然である。その頃まで慧可の弟子が生存していたとすれば、破佛の頃まで慧可が生存していた可能性は非常に高いと言わねばならない。

## 二、達摩菩提と慧胥に關する史實

次に達摩菩提や慧胥に關する史實を明らかにしておこう。

達摩菩提に關しては、經錄等に『涅槃論』の譯者で、北魏の人だとされる以外には何らの事跡も傳えられていないようであるが、慧胥については、先に言及した「智敷傳」によって、

次のような諸點を知ることができる。

- 1、周の武帝の破佛の際に中原から陳に逃れてきた、跋摩利三藏の弟子である慧胥が、使者の劉璋とともに南海（現在の廣東省廣州市）に行き、そこで『涅槃論』を手に入れた。
- 2、太建十一年（五七九）以降、初めは恐らく循州（廣東省惠州市の東北）の平等寺において、次いで慧胥の住處の豫章（現在の江西省南昌市）の鶴嶺山で、智敷は璣法師とともに慧胥の『涅槃論』の講義を聴き、「序分種性分前三章」の玄義と「第三分」を學び終え、「十海十道」を得たが、その後、慧胥の病氣のため、講義は中斷を餘儀なくされた。
- 3、太建十四年（五八二）、智敷は『涅槃經』の殘りの部分の講義を聴くべく、慧胥の指示に従って、建業に海潮法師を尋ねたが、捜し當てることは出来なかつた。その替わり栖霞寺の慧曉禪師に出遇い、曇林的『涅槃經』の註疏を授けられた。それは『涅槃論』と通ずる内容を持っていたが、十分とは言えなかつた。
- 4、智敷は、その後、循州に歸り、「新文十三章」、即ち『涅槃論』の講義を二十遍近くしたが、開皇十二年（五九二）の王仲宣の亂の際に、それに關する章疏類は全て焼失してしまつた。そのため、その後は主として『攝大乘論』の講義を行ない、高弟二十五人を得て、仁壽元年（六〇二）に歿した。

智敷は太建十四年に慧胥の指示に従って建業に海潮法師を尋ねたわけであるが、これは恐らく慧胥の入寂を前提とした

ものであろうから、慧智はそれ以前に既に亡くなっていたはずである。『續高僧傳』は慧智の年齢には一切言及しないが、眞諦三藏(四九九—五六九)の弟子の智敷が師事したということからすれば、相當の高僧であつたと見ねばなるまい。

ところで、『涅槃論』をめぐる様な設定が事實ではなく、流通のための創作としか考えられないことは別に論ずる通りであるが、ここで問題なのは、「跋摩利三藏」の弟子を名乗り、「南海」で得たと稱しておきながら、慧智はどうして『涅槃論』が「元魏」の「達摩菩提譯」であるなどと言ひ出したのかということである。單に權威付けだけが目的であれば、達摩菩提を「陳」の人とするか、「陳」の「跋摩利譯」としたほうが遙かに自然であつたはずだからである。従つて、そうした設定を慧智が敢えて採つたところには、それなりの理由があつたと考えねばならないのであるが、それが出身地、北魏への強い愛着であつたことは恐らく間違いないであろうし、「達摩菩提」の名に拘つた点から見て、北魏における達摩菩提との何らかの關係が、それと分ち難く結びついていたことは容易に想像がつく。

### 三、両者の接點について

以上、菩提達摩と慧可、達摩菩提と慧智のそれぞれに關して事實と認め得る事柄を検討したので、次に種々の點から兩

者にいかなる接點があるかということを問題にしてゆこう。

#### a、名稱について

先ず問題となるのは、その名稱の類似である。菩提達摩が古く「達摩菩提」とも呼ばれたということは、次のような事實から見て、ほとんど疑う餘地がない。即ち、青蓮院文書『大乘入道』の冒頭に引用書目を掲げる中に「菩薩大乘坐禪法亦名壁觀三昧法。葉波國師達摩菩提說」という書名を載せているが、この「達摩菩提」は「壁觀」と關聯づけられているのであるから、明らかに「菩提達摩」を指す。しかも、ここで「葉波國師」とされているのは、『洛陽伽藍記』に「波斯國胡人」というものの轉訛であろうが、『二入四行論』も『續高僧傳』も「南天竺國」の人とするのであるから、それ以前の古い傳承に基づくとも考えられるのである。

また、智昇の『開元釋教錄』(七三〇)では、『涅槃論』を達摩菩提の翻譯と認めたくえで、それとは別に偽造の三卷本の『涅槃論』が流布しており、それも「達摩菩提譯」とされていると述べるのであるが、恐らくこれは『楞伽師資記』(七一—七二六頃)の「菩提達摩章」で「自外更有人偽造達摩論三卷。文繁理散。不堪行用」というものに相當するであろう。卷數が一致しているうえに、言及する兩文獻の成立時期も非常に近いからである。従つてこれも、八世紀初頭にあつては禪宗内でも「菩提達摩」と「達摩菩提」とが明確には區別さ

れていなかったことを示すものといえよう。

更に、『景德傳燈録』が、卷第三の慧可傳で「菩提達磨」に註記して「舊本云。達磨菩提」と言っているのも、古く菩提達磨が「達磨菩提」とも表記されていたことを窺わせる。

一方、「慧可」と「慧胥」に關しては、『廣韻』に據れば、「胥」も「可」も上聲の「胥」の韻に屬し、前者は「古我切」、後者は「枯我切」で、類似した發音と見られ、また、「胥」は『說文解字』に「可也」と訓じているように、意味的にも「可」に通ずるのであるから、同一人物の名稱として「慧可」と「慧胥」が用いられたとしても、少しも異とするには當たらないはずである。

つまり、菩提達磨が「達磨菩提」と呼ばれ、慧可が「慧胥」と呼ばれたという可能性は十分にあるのであって、少なくとも名稱の相違のみを根據に兩者が同一人物であることを否定することは困難なのである。

#### b、年代的・地理的關係

慧可の入寂については何も知られないが、先に見たように、少なくとも北周の破佛の頃までは生存していたと考えられる。一方、慧胥も晩年に破佛に遭遇し、それを避けて南遷したとされており、傳記に共通點が認められる。

法冲が慧可の弟子に教えを受けたのは安州（現在の湖北省安陸縣）においてであったと考えられるし、既に指摘されてい

るように、『續高僧傳』卷第二五の「辯義傳」に據れば、慧可の弟子と見られる曇暉師がかつて廬州（現在の安徽省合肥市）の獨山の梁靜寺に住しており、仁壽四年（六〇四）以前に亡くなっていたことが知られる。また、後の禪宗で第四祖とされ、僧璨に師事したとされる道信は、『續高僧傳』卷第二〇「道信傳」に據れば、十二歳の時（五九二）舒州（現在の安徽省潛山縣）の皖公山で何處からともなく現れた二人の僧に禪を學び、十年間に及んだという。そして、後にこの二人は道信を置いて羅浮山に去つたというのであるが、これらの傳記によつて慧可の弟子の多くが安徽省から湖北省にかけての長江北岸の地域に分布していたことが窺われる。慧胥が南遷の後に住したという豫章も、長江以南という相違はあるものの比較的近く、ここにも慧可と慧胥の關係を看取することができるのではあるまいか。

更に、慧胥が南海で『涅槃論』を得たということと、道信の師の二人の僧が後に羅浮山へと移つたということとの間にも何らかの關係があるのではないかと疑われる。羅浮山は循州にあるが、そこは南海にも近く、また『涅槃論』の講義が初めて行われた智敷の平等寺のあつたところでもある。

更に想像を逞しくすれば、道宣自身、或いは菩提達磨と達磨菩提、慧可と慧胥の關係を疑っていたのではないだろうか。『續高僧傳』において菩提達磨が宋の時代に海路中國に來た

とされたのは、慧智や智敷の活動によつて「達摩菩提譯」の『涅槃論』が南朝の陳で流布し始めたことと關聯するのではないかと疑われるからである。

### c、曇琳との關係

『涅槃論』を介して、慧智は「達摩菩提」と接點を持つが、更に慧曉を介して曇琳とも結びつく。道宣に據れば、『涅槃論』に精しい海潮法師を求めざる智敷に對して、建康の名徳、栖玄寺慧曉は曇琳（曇林）の『涅槃經』の註疏を與えたというのである。この行爲は、恐らく曇琳と慧智との間に密接な關係があるという認識を前提とするものであろう。一方、慧可については、先に見たように古くから曇琳との關係が伝えられていたのであるから、慧可と慧智の間に關聯性を認めるのも、強ち無理とは言えないのではないだろうか。

### d、『涅槃論』と興皇寺法朗

別に論ずるように、『涅槃論』と三論宗の興皇寺法朗の『涅槃經』の科文は極めてよく似ており、『涅槃論』の作者（慧智）と法朗の素養が極めて近いものであったことを示すものと言えるが、非常に興味深いことに、法朗と慧可については、その素養に共通するものがあつたことが資料的に確かめられるのである。即ち、『續高僧傳』卷七の「慧布傳」に、慧布が慧可に參問した後のこととして、

「乃縱心諸席。備見宗領。周覽文義。竝具胸襟。又寫章疏六駄。負慧可と慧智（伊 吹）」

還江表。竝遣朗公。令其講說。因有遺漏。重往齊國。廣寫所闕。齋還付朗。」

と述べられているのである。三論宗における『涅槃經』の研究は實に法朗に始まるのであるが、法朗が『涅槃經』を重んじ、また、その科文が河西道朗や地論師の影響を受けているのは、恐らく、この慧布の活動に由來するのであろう。

それはともかく、ここで重要なことは、『續高僧傳』の行文から明らかのように、法朗が慧布を通して得た章疏の類が正しく慧可の周圍で行われていたものであつたということなのである。従つて、もし慧可と慧智が同一人物であつたとすれば、『涅槃論』の科文が法朗のそれと非常に近いのは、同じ北地における涅槃學の傳統を受けたからに他ならないわけであらう。全く異とするには當たらぬこととならう。

### e、『涅槃論』の思想と『楞伽經』『二入四行論』

私見によれば、『涅槃論』は、元來、慧智の講義と一體の關係にあつたはずであるから、そのみでは、その思想を十分に理解することは困難である。しかし、吉藏や灌頂などの引用から見ると、彼らには、次の文章に見られる、衆生と佛の相即を説く主張が思想的特色と映つたようである。

「願佛開微密。廣爲衆生說。云何微密。身外有佛亦不密。身内有佛亦非密。非有非無亦非密。衆生是佛故微密。云何衆生是佛。衆生非有非無。非非有非非無。是故衆生是佛。」

ところで、天台智顛の『法華玄義』には、次のような記述を見ることのできる。

「有言頓悟即佛。無復位次之殊。引思益經云。如此學者。不從一地至一地。又有師言。頓悟初心。即究竟圓極。而有四十二位者。是化鈍根方便。立淺深之名耳。引楞伽云。初地即二地。二地即三地。寂滅眞如。有何位次。」(卷五上)

「九者北地禪師。明二種大乘教。一有相大乘。二無相大乘。有相者。如華嚴瓔珞大品等。說階級十地功德形相也。無相者。如楞伽思益眞法無詮次。一切衆生即涅槃相也。」(卷十上)

つまり、北地の禪師などに『楞伽經』や『思益經』に基づいて「頓悟」説を説き、「一切衆生即涅槃相也」と主張する人々があつたといふのである。この思想は明らかに『涅槃論』と軌を一にするものであつて、當時の認識においては、『涅槃論』の主張が『楞伽經』のそれと必ずしも無關係とは考えられていなかつたことを知ることが出来る。

また、この「衆生是佛」思想に、『二入四行論』の、

「理入者謂藉教悟宗。深信含生凡聖同一眞性。但爲客塵妄覆不能顯了。若也捨妄歸眞。凝住壁觀。無自他。凡聖等一。堅住不移。更不隨於言教。此即與眞理冥符。無有分別。寂然無名。名之理入。」

という「理入」の思想と通底するものを認めることも困難ではないであらうし、更に、こうした思想が後代の禪宗と直結するものであることも明らかであらう。従つて、この點からも『涅槃論』と慧可を結ぶ線を想定することは不可能ではな

いと思われる。

### むすび

以上、『涅槃論』が慧胥の著作であるという前提のもとに、様々な點から菩提達摩と達摩菩提、慧可と慧胥が同一人物である可能性を探つてきた。その結果、確實な根據は示すことはできなかつたが、多くの點で兩者に類似や關聯性が認められることを明らかにした。論證としては十分ではないから、安易に同一視することは差し控えねばならないが、もし、この假説が認められるのであれば、これまで明確ではなかつた慧可の晩年の事跡が略ぼ特定できるばかりでなく、慧可自身の思想や性格についても、我々は從來の見方を大幅に改めなくてはならなくなるはずである。

〔附記〕『涅槃論』の成立、並びに本稿の詳細については、近く『東洋學研究』(東洋大學東洋學研究所)に掲載する豫定であるから、併せて参照されたい。

(キーワード) 慧可、慧胥、菩提達摩、達摩菩提、涅槃論

(東洋大學助教)